章 カストロプ動乱前夜

「……と言つことで、その健気な女の子が退院するまで、毎日のように励ましに行つていたということなの。中々できることではないわね」

「あの、伯爵夫人、毎日ではなくて……精々三日に一回くらいが正確な数字なんです」

「からかっているではありませんよ、ミハエル・タウゼントシュタイン。誉めているのです」

「ですから、教官……あ、いえ、伯爵夫人にお褒めいただくのも後が怖いよつな気がして」

「誉めるべきことは誉めるし、叱るべきことはきつちり叱ります。士官学校の時に、十分にお話してあつたはずよ。あなたは誉められるべきことをしたのだし、あなたが本気だと分かつたからサポーターもしました。わたくしにはその力があつたのだし、そうするべき立場でもあつたけれど、あなたがいなければ気付かなかつた。そういうことだと諒解なさいな、ミハエル」

「そういうものでしょうか」

「そうですね」

かつては金髪だつたのだから、既にすっかり銀白色に変わった髪を古風な形に結び上げた老貴婦人は、ひどくきつぱりとした口調で言い切る。すでに七〇歳は超えていると言つが、耳も足腰も確かだ

し、老貴婦人というのは少々失礼な呼び方になるのかも知れない

ミハエルはそう思う。彼が士官学校一年の時、驚くべきことにこの貴婦人は数学の正規教官で、講義の厳格さは有名だつた。厳格なだけでなく正確で、例えば高等教育期間の教官職にありがちな講義の退屈さもまったく無縁だつたことがミハエルの記憶にも新しい。入学前は数学が苦手だつた自分が、落ちこぼれることもなく、むしろ優秀な卒業生として士官学校の門を出られたのも、この人のおかげによるところが大きい。ミハエルはいつもそう思っている。

ミハエル・タウゼントシュタイン。現時点で帝国軍中尉。やや長めにカットした柔らかめなブラウンの髪と、髪よりもやや色の濃い焦げ茶色の生真面目でちよつと堅苦しげな目をした若者である。とは言つても、若い軍人にありがちな『軍人です』と顔全体で主張しているような堅さは薄く、やや華奢な頬から顎のラインは繊細と云つていいほどで、普段の表情の堅苦しさを裏切っている。笑つと、目尻が下がつて表情の生硬さがはぐれ、いっぺんに出身の少年の表情が顔を覗かせる。

一方、老貴婦人の名はマリア・アントニア・フォン・ロートリンゲン伯爵夫人。有名な数学者であり、本来は国立文理科大学の数学教授なのだが、請われて士官学校や、時には幼年学校の数学教官・兼・生活指導教官を務めることがある。

帝国暦四八七年二月初旬。ミハエルがウジー・ザーネヘルンシュテラーと出会つてから既に二ヶ月余りが経っていた。

「それで、そのウジーという娘の怪我は治つたのかね？」

ロートリンゲン伯爵夫人とミハエルと差し向かいにソファに身を沈めている壮年の男性は、いくらか疲れて見えた。まだ十分な量は

残しているが艶を失ったブラウンの髪がそんな印象を与えるのかも知れなかったが、実際に表情には力がなかった。何日も十分に眠っていないらしく、疲労が皮膚を透かして甚だしく肌の色を損なっている。

「治りました」

「君がサポートしたんだね、マリア・アントニア」

「サポートはしましたよ、フランツ。普通なら右手は動かなくなつて、その娘はケーキ職人の夢を諦めなければならぬ、それくらいかなり酷い怪我だったそうです」

「伯爵夫人が治療費を援助して下さいましたんです、伯爵。俺の……いえ、小官ではとても手に負えませんでしたから」

思わず口を挟んだミハエルに、男性は好意的な表情でうなずいて見せた。

『おとなしくしていたら、将官の端くれくらいにはなれるかも知れないけれど、多分、正直すぎる、それから正義感の強すぎる性格が脚をひっぱるでしょうね』

ロートリンゲン伯爵夫人マリア・アントニアは、ミハエルのことをそう男性に紹介した。

『士官学校を卒業ですぐに憲兵隊総監部で副官任務を大過なく果たしていたようだから、これで十分に有能な若者ですよ』と。

「だから言ったでしょう、ミハエル。わたくしはロートリンゲン伯爵夫人です。ラストエンテはロートリンゲン伯爵家の旧領です。ラストエンテの出身者が窮地に立っているのなら、そして救ける余裕があるのなら救けるのはわたくしの義務です。あなたは、わたくしに義務を行使する必要があることを知らせてくれた。そういうこと

ですよ」

ロートリンゲン伯爵は、かつて帝国辺境領を支配するかなり有力な貴族だった。同時にゴールデンバウム王朝の歴代皇帝が理由もなく忌避した文化や伝統を密かに保護し、継承していた人々に庇護の手を差し伸べるという裏の姿を併せ持っていたのだと言つた。

破局が生じたのは数十年前。ロートリンゲン伯爵家が保護していたあるグループの伝えていた童話とそれにまつわる古い歌とが、ルドルフ大帝の嫌忌するところのものであったことが偶然にも暴かれてしまったのだ。伯爵家の当主は死を賜り、ラストエンテもまた伯爵家の庇護を失って、現在は暫定的に帝室の直轄領に編入されている。

伯爵家が健在であった頃、歴代のロートリンゲン伯爵はラストエンテの住民が守り続けている多数の非帝国公用語についても寛大であり、その保存や教育にも密かに資金や援助を与えていたのだが、伯爵家の没落以降は失われている。帝室の代官はラストエンテの文化や風習には無関心であり、それが反帝国の姿となつて公然化しない限りはことさらに弾圧はしていないようだが、ロートリンゲン伯爵家時代を知る住民の反発は強い。

マリア・アントニアはマリーンドルフ伯爵家の出身であり、名家であるロートリンゲン伯爵家の名跡のみを継いで伯爵夫人を名乗る身になっている。ただし、ラストエンテ星系が伯爵領に戻ることはなかった。帝国は、ロートリンゲン伯爵家を復旧はさせたものの、領地は返さなかったのだ。

しかし、マリア・アントニアはロートリンゲン伯爵家当主として、ラストエンテの住民には可能な限りの援助の手を差し伸べてくれて

いる。士官学校受験の際、ミハエルが帝都で頼ったのはこの伯爵夫人だった。

ある程度は覚悟の上のことで、それなりの対応も準備してきたのだが、ミハエルに検問され、ウジーをかつさらわれてしまった例の貴族連中からの抗議は想像を超えて執拗だった。上官のブルーメンタール中將は最初っからミハエルを庇う気などなく、『厄介ことを持ち込みおつてからに！』とあからさまに彼を非難するありさまだった。

彼を救ってくれたのは、当時、まだ帝都の憲兵隊本部に籍を置いていたウルリッヒ・ケスラー大佐と、ミハエルよりも三年ほど先に帝国軍に入り、今は情報部大尉となっているレオンハルト・オストザイデだった。

ケスラーは、この時、死の床にあったグリーンメルスハウゼン子爵の諒解を得て件の貴族一門との折衝に当たった。ミハエルの集めた忌むべき連続殺人への明白な関与を示す一連の証拠。とくに車内で収集した、複数の犠牲者のDNAとウジーの証言で描かれた似顔絵が決定的だった。

「これらが公開されれば、たとえ刑事罰を免れても、貴家の宮廷での生命は絶たれたも同然となるとはお思いになりませんか？」

拒否すればいかなる手段を取っても情報を公開する。ケスラーが言外に匂わせた脅しもまた預かって効果があつたといふべきだろう。単に大佐という階級やグリーンメルスハウゼン子爵の後ろ盾を除いても、ケスラーという人物は有力貴族にとつても敵に回したくない相手と思わせるところがあつた。

犯罪に関する完全沈黙の約束、およびミハエルのブルーメンター

ル中將副官からの罷免を条件に、ケスラーは陰惨な犯罪に手を染めた三人の幽閉と、ミハエル、ウジー、そしてブランドミュラー・ケーキ店の安全という条件を引き出してくれたのだ。さらに、ケスラーからの依頼をうけたオストザイデ大尉が、情報の保管を約束してくれた。本来、完全な職務外のことだったが、オストザイデ大尉は気にしなかった。『同郷の人間を救けるんなら問題はない』と。

「卿が罷免される必要はないと思うが、私ももう帝都には長くいられない」

話をミハエルに伝えた剛毅な憲兵大佐は、そこで声を潜めた。

「ブルーメンタール中將は卿が長く上官として仕えるに値するほどの人物ではない。だから、敢えて卿の罷免には異を唱えなかったのだ。しばらくは身を慎め、中尉」

「はい、大佐。ありがとうございます」

「もし、その機会があつて、ラインハルト・フォン・ミューゼル、またはジークフリード・キルヒアイス。この二人の部下か同僚になれる機会があつたら躊躇うな。それが卿にとつての最大のチャンスになるぞ」

「ラインハルト・フォン・ミューゼル、ジークフリード・キルヒアイス……ですか？」

ジークフリード・キルヒアイスはともかくラインハルト・フォン・ミューゼルの名には記憶があつた。叛徒領ヴァン・フリート宙域の会戦で、敵の准将を捉えた若き准将。『古代の名匠が精魂を込めて彫り上げた、最上級の大理石のような美貌の若者』という表現を何かで読み、そんな美少年が実際にいるはずはないと思つた記憶がある。それだけだった。敬愛すべき憲兵隊の先輩が、なにゆえにその

『美少年』をそれほどまで高く評価しているのかは、ミハエルの理解を遠く離れていた。

とは言え、ケスラーのおかげでミハエルもウジーも生命の保証を得たようなものである。その言葉を無下にすべき理由などにもなかった。

「分かりました、大佐。必ず、その時は機会を掴みます」

「私にできるのはここまでだ。達者でな、タウゼントシュタイン中尉」

年明けと前後してグリーンメルスハウゼン子爵が亡くなり、それと相前後するようにしてケスラー大佐も帝都を去り、同時にミハエルはブルーメンタール中将副官職を解任された。中將に対して特に思い入れもなかったし、何よりも部下を庇わない我が身大事だけの人物であることも明らかだったので、何の執着もなかったのだが、副官職を失って給与が中尉としての基本給だけになってしまったのは痛手だった。何しろ、ウジーの怪我は考えていた以上に深刻なものだったからだ。

「手術と二ヶ月のリハビリ入院は必須だ。でないと、ケーキ職人として必要な指先の動きは恢復できなくなる」

それが医者からの宣告であり、ウジーにとつては死刑判決も同然だった。

「……どうしよう、もう貯金もないし、このまま手が治らないんじゃない、雇い続けるのも難しいって言われちゃったよ」

診断結果を聞かされた時、ウジーにはさすがにいつもの気丈さはなかった。

ラストエンテを二分する二つの政治勢力……と言つほど大げさな

モノでもないのだが……の内の一つ、いわゆる独立派が、ミハエルのタウゼントシュタイン一家が属するグループだった。一方、ウジーの一家はもう一派の、いわゆる宥和派に属している。

実は、タウゼントシュタインともう三つの家、四つの大きな一族が独立派の中心で、彼らはそれなりの資金と人脈を持ち、その中で毎年のように士官学校や帝都の有力大学に子弟を送り込んでいる。

ウジーが彼らと同じグループに属する一家の出身なら、そうした資金の中からの援助も可能はずだった。

ミハエルは宥和派の有力者であるシュタインウンタープレッヒャーにも連絡を取ったのだが、タウゼントシュタインの名を告げただけで、取り次いですらもらえなかったのだ。いくらウジーのことを説明しても無駄だった。

マクシミリアン・ヨーゼフ二世によって多少の整備は見たとは言え、帝国の社会保障制度は貧弱の一言に尽きた。治療に要する費用は高額であり、まだ見習い職人でしかないウジーにそんな蓄えも、私的保険の用意もあるわけもなかったのだ。雇い主のブランドミュラーにしても、職人としての修行を続けられなくなったウジーを雇い続けられる余裕はないというのが実情だ。

費用は何とかするから手術だけはまず受ける……説得するミハエルに、ウジーは事情の一切は察していたに違いない。

「悪いよ、中尉さん」

「同じ故郷の人間を助けるんだ、何が悪いもんか」

ウジーの最初の手術費は何とか捻出したが、一月目の入院費を支払う前にミハエルの蓄えも底をついてしまった。何と言ってもまだ士官学校を出て二年目でしかなく、それでも多少の蓄えができてい

たのは副官職という、激務だが実入りのいい地位を得ていたからなのだが、それも解任されてしまったとなると……

「やれやれ、このままじゃ、強盗でもやらなきゃならないかも」

万策尽きた思いのミハエルだったが、万に一つの機会を求めて訪ねたのがロートリンゲン伯爵夫人だった。

「分かりました、タウゼントシュタイン中尉。その娘がラストエンテの出身者ということなら、わたくしにも庇護の義務があるでしょう。ただし、無償ではありません。何年かかっても良いから、きちんと返済してもらいます。宜しいですね。それにしても何を馬鹿なことをやっているのかしらね。たかが数百万人程度の住民が、独立派だ、宥和派だといがみ合っていて、助けの要る女の子一人救ってやれないなんて馬鹿げているわ」

マリア・アントニアの口調は辛辣だった。

伯爵夫人の切ってくれた小切手のおかげで、ウジィは無事に手術後のリハビリを終え、右手の機能を回復することができた。

「元通り手が動くようになったんなら、いつでも帰ってきてくれて良い。部屋もちゃんと整えておくから。にしても治って良かったな」

店主のブランドミュラーも快く承諾してくれ、晴れて退院したウジィが店へ戻ったのは一〇日ほど前のことである。一方、ブルーメンタール中将副官職を解任され、待命となったミハエルのもとに、暫定任務として通知されたのがマリア・アントニア・フォン・ロートリンゲン伯爵夫人の私的護衛任務だった。二ヶ月ほど、中尉ら副官職の経験のある若い士官を護衛任務にお借りしたい……それが伯爵夫人から帝国軍への申し入れだった。

帝国軍の士官を貴族の私的な護衛任務に充てる。一種の公私混同

に近い話なのだが、珍しい話ではなかった。帝国軍にとっては、一般平民を守るよりも大貴族の生命財産を守る方が優先度の高い任務であることもまた事実だったのだ。伯爵夫人の出した条件にぴったりに当てはまるのは、この時点でミハエル一人であり、当然のようにミハエルに白羽の矢が立った。

任務を受領し、伯爵邸を訪れたミハエルに、マリア・アントニアは今日の午後ピクニックに出かけるといふような口調で告げた。

「これから宇宙港^{デューベルグ}へ行きます。行き先はマリィンドルフ星系。片道一週間の旅よ。三時間以内に準備してきて下さいな、中尉」

五時間後、ミハエルはこの老貴婦人とともにマリィンドルフ星系へ向かう定期船の中にあつた。一ヶ月ばかり帝都を不在にすることと、暫定ではあるが新しい任務を得たこと。ウジィにはメールでそう伝えるのが精一杯だったが、返信はすぐに来た。

『新任務おめでと。今度、店に出すケーキを一人で焼いて良いことになったから、帰ってきたらご馳走するよ。楽しみにしててね』

メールの中で楽しげなウジィの笑顔が踊っていた。

マリィンドルフ星系までの旅は一週間。到着するやいなや、マリア・アントニアが指示した行き先は、他ならぬマリィンドルフ伯爵の本邸だった。

「君のことだから、きちんと返済してもらつていいながら、無利子・無期限なんだろう？」

男性……マリィンドルフ伯爵家当主のフランツ・フォン・マリィンドルフは苦笑を隠せない様子だったが、マリア・アントニアは平然とした表情を崩さなかった。

「当然です。困っている女の子から利息を取るようなことはしません。でも、困ったら無償で救ってもらえる、などと思つようになつては、やはりその娘のためにはならないでしょう、フランツ。ミハエル……いいえ、タウゼントシュタイン中尉にも言い聞かせてあります。立て替えた手術費用もちゃんと返しておもらいなさいとね」

「随分高額だろう」

「そうかもしれないですね。別にわたくしが生きている間に返してくなくても良いのです。一年もしたら、わたくしも貸したことなど忘れてしまつかも知れませんがね。要は、恩は着せるものではない、着るものだといいことですよ。そのことを分かつてくれれば、それで良いのですよ」

「君には勝てないな……で、今日、わざわざ来てくれたのは、その幸せな女の子の話を聞かせてくれるためかね」

「とぼけるのが下手ですね、フランツ。相変わらず」

「何をとぼけていると言つたかね」

「分かっているでしょう、マクシミリアンの件です。マクシミリアン・フォン・カストロプ」

「マリア・アントニアの声が厳しくなる。」

「ミハエルも思わず息を呑む。」

カストロプ動乱と呼ばれる事件が勃発したのは、つい先日のこと
で、ミハエルもよく知っていた。

カストロプ動乱については『正史』に詳しいので改めて述べる必要はないが、帝都から派遣された徴税官に、マクシミリアン・フォン・カストロプが有角犬ホシケツドをけしかけて追い払ったのが先月半ば頃。
無礼を怒った帝国政府が、國務尚書リヒテンラーデ候の名を以て手

厳しい召喚状を発したのが、そのすぐ後のことである。

『正史』にもあるように、マクシミリアンの反応は常軌を逸していた。帝都へ出頭するどころか、周辺星系に配置されていたカストロプ侯爵軍を主星へ呼び戻し、あまつさえ大規模な軍需物資の買い付けまで始めたのである。誰が見ても、マクシミリアンが帝国に反旗を翻す準備を始めたと考えざるを得ない状況だった。

「カストロプ侯爵家は帝国に対して反逆の意を示したり」

帝国政府は宣言し、制式艦隊の内からシュムデー提督麾下に約二五〇〇隻の任務部隊の編成を始めた。

かつて長年にわたって財務尚書をつとめたカストロプ侯爵家は屈指の大貴族であり、親族・縁戚は多い。その中から何人がカストロプ星系へ出向いて、マクシミリアンに帝都出頭を説いたが、これまで成功したという話は聞こえてこない。

「フランツ、あなた、行くつもりなのでしょう。マクシミリアンのところへ」

「カストロプ星系は、このマリーンドルフ星系の隣接星系なんだよ、マリア・アントニア。それにカストロプ侯爵家は何代も前からマリーンドルフ伯爵家とは縁続きだ。私が行かないわけにはいかないだろう」

「お隣だから迷惑をかけられたことはあっても、世話になったこと
はなかったでしょう？ マリーンドルフ伯爵家に、カストロプ侯爵家
に対して着なければならぬような恩が一つでもあったとはわたく
しは思いませんよ、フランツ。オイゲン卿が存命の間も、財務尚書
の地位と侯爵家の財力を傘に着てやりたい放題。何度マリーンド
ルフ伯爵家が迷惑を被ったか知れない。でも、そんなことはどうでも

いいのです」

「マリア・アントニア……」

「いいですか、フランツ。マクシミリアンがまともな青年なら、わたくしもあなたが行くのを止めません。でもね、あなたはマクシミリアンをヒルダの婿候補にしたいと本気で思いかしら？」

「それは」

マリーンドルフ伯爵が絶句する。

ヒルダって誰だろう……ミハエルはそつとマリア・アントニアの顔を伺うが、厳しく引き締まった伯爵夫人の表情は、彼が口を出す隙を与えてはくれなかった。それにしても、自分はどうしてこの席に同席させられているのか、それがミハエルには分からない。マリア・アントニアの私的護衛というのであれば、わざわざ応接間で二人の伯爵と同席し、コーヒーのお相伴にあずからねばならないと言うことはない。伯爵夫人の身に危険があるなら、邸の庭あたりを一回りしてきた方が良さそうなのだが。

それとも　とミハエルは思い直す。マリア・アントニアが考えもなしに、彼を同席させると言つこととはあるまい。彼女は明らかに彼女とマリーンドルフ伯爵との会話を聞かせようとしているのだ。では、拝聴するのが筋というものだろう。

「無論、最終的にはヒルダの意思が優先しますけれどね……問題は、ヒルダの同年配の男性として、マクシミリアンが評価に値する人間だと本気であなたが思いなのかどうかです」

「それは……確かに、難しいと思うが……」

「思うが……じゃないのですよ。わたくしが知っているだけで、もう五人が説得に行っています。しかも、行くことにマクシミリアン

は態度を硬くしています。いいえ、硬くと言うより高飛車になってきています。つまり、侯爵軍の準備が整ってきていて、マクシミリアンはあらぬ自信を持ち始めているのだと、わたくしは思います。侯爵軍の準備ができて、たとえ帝国軍に攻められても跳ね返せる。マクシミリアンがそんな馬鹿なことを考えていたとしても、わたくしは全然驚きません。マクシミリアンの耳にはもう親身な忠告など入りはしません。思い上がった拳げ句に、帝国軍相手に戦ったりするな、などと言われても、マクシミリアンは、こいつは、帝国軍のスパイだ、などと思うだけです。そんなところへあなたが行ったらどうなると思いですか？」

「確かにマクシミリアンは……ちょっと常識に欠けたところもあるし、良い判断力があるとも言えない若者だ。今が最後の機会だとすれば、私は行くしかないと考えているよ。今、止められなければ山の血が流れる。それだけは何とかして避けたい。君はそうは思わないのかね。確かに止められないかも知れない。しかし、止められるかも知れない。止められるかも知れないのであれば、僅かな努力を惜しむべきではない。私はそう思っている」

マリア・アントニアは大きくため息をついた。

「頑固ですね、フランツ」

「あなたもだよ、マリア・アントニア」

「それで、この件はヒルダに話してあるのかしら？」

「ヒルダに？」

マリーンドルフ伯爵は明らかに動揺したように渋い表情になる。

「どうやらヒルダというのは伯爵にとってかなり煙たい存在らしい。マリーンドルフ伯爵の正夫人は早くに亡くなっていると聞いている

が、あるいは古くからいる家事取り締まりの女性か、それとも愛人の一人なのかも知れないな　でも、だとするとさっきの『婿候補』の意味が分からなくなる。

ミハエルのあらぬ妄想をよそに、マリア・アントニアの口調が再び厳しくなった。

「ヒルダなら、この時期にあなたが一人でカストロプ星系へ出向くなどと言う愚行を許すわけはありません」

「この件は、ヒルダには話していない。無用の心配をかけたくなからね。手紙は何通も来ている。カストロプになど行くかなと……ね」

「呆れますね、フランツ・フォン・マリーンドルフ伯爵」

きつい調子でマリア・アントニアはマリーンドルフ伯爵の言葉を弾き返した。士官学校の教室でマリア・アントニアにさんざんに絞られた記憶がよみがえったミハエルは思わず首を竦める。

「ヒルダはあなたの娘というだけではなく、マリーンドルフ伯爵家の跡継ぎです。それなのに、あなたはヒルダにカストロプ星系へ行くことすら告げていない。一つ間違えば、ヒルダはすぐにもマリーンドルフ伯爵家を嗣がなければならないというのに」

娘なのか　ミハエルは自分の思い違いに苦笑しかけ、それからマリア・アントニアの一瞥を受けて慌てて浮かびかけた笑いを引っ込める。

「マリア・アントニア、そんな大げさなことではない。私は親族の代表として、マクシミリアンに翻意を促しに行くだけなんだ。私の生命がどうなると言っようなことではないのだよ」

「もし本気でそうお考えなら、大変な誤りですよ、フランツ」

もう一度、大きくため息をつく、マリア・アントニアは冷めかけたコーヒーを口に運んだ。

「それがマリーンドルフ伯爵としての決意で、もうどうしても動かし難いというなら、二つだけ認めて頂きたいことがあります。それさえ認めていただけると、もうわたくしがあれこれ言うのも無駄なことと諦めます」

「ヒルダに話す、というのだね」

「ええ。ヒルダは、状況さえ話しておけば、後はすべて一人で判断できる娘です。あなたに万一のことがあったとしても、最善の判断をしてくれるでしょう。それと、あなたには用意していただきたいものがあります。マリーンドルフ伯爵家当主として義務を果たすために最小限必要なものです。あなたはどうかあれ、わたくしはこういうものが必要なほど、今の事態はこじれていると考えています。宜しいですね、フランツ・フォン・マリーンドルフ？」

大きくため息をついたのは、今度はマリーンドルフ伯爵の方だった。

「わかった。君がそこまで言うなら用意しよう。何をどう話すかは君に任せてよいね」

「ええ……それと、もう一つあります。わたくしが帝都に戻ったことをあなたにお知らせするまでは、カストロプへ発たないで頂きたいのです。何とでも理由は付けて下さいな。とにかく、わたくしから連絡するまで絶対にマリーンドルフ星系を離れないこと。それさえ守ってくれるなら、いずこなりともあの愚かな若者の説得にいらっしやうって結構ですわ」

「それは……難しいな。二日後の昼にマリーンドルフを出ると、マ

クシミリアンには約束してある。向こうも色々取り込んである折からだ、会いに来てくれるなら、できるだけ早いほうがいい。そう言っていた」

「だから、説得の見込みがある。そう思ったのでしょっつ」

「その通りだ。こちらが一方的に延期すれば、マクシミリアンは……私が約束を破ったと思うだろうし、まとまる話もまとまらなくなるのではないかな」

マリア・アントニアが、マリンドルフ伯爵に対して単純な好意だけの笑顔を浮かべたようには、なぜかミハエルには思えなかった。憲兵隊総監部で副官職に就いていたころ、上官や、上官の同僚が、しばしばこつした微笑とも苦笑とも憫笑とも、何とも付かない表情を浮かべるシーンに出くわすことが多かった。多く、相手の不明さに対する嘲り、哀れみ、あるいは困惑を含んでいたように思うのは決して錯覚ではないと思う。この時のマリア・アントニアの微笑が、多分に相手の不明と言つよりも頑なさに対する困却を包んだものに間違いはなかったから、ミハエルの観察は的を射ていたといつべきだろう。

「ほんの数日です」

口調が、鉄を切る靱さを孕んだ。

「何とでも理由を付けて下さい。それが、マリンドルフの家……いいえ、マリンドルフ伯爵家などどうでも宜しいのです。あなたとヒルダの二人、こんなところで躓いて欲しくはありませんからね」

怪訝そうに……マリンドルフ伯爵の表情を観察していて、ミハエルは僅かに安堵を覚える。大貴族と言われる人々は頭の構造が違っているのではないかと内々に思わないでもなかったのだが、

マリア・アントニアの言葉がすぐには理解できなかった点で、どうやら彼とマリンドルフ伯爵はさして差はないようだった。実際、この老貴婦人の言葉は唐突に過ぎて、ミハエルの理解を超越しすぎている。

「そついうことかね？」

ややあつてマリンドルフ伯爵が呟いた一言はミハエルを失望させた。彼には未だ理解の糸口すら見いだせない、銀髪の老貴婦人の言葉を、早くもこの伯爵様は理解してしまったといつのか。

僅かに顎を引き、マリア・アントニアは首肯の意を示して見せた。「ミハエル・タウゼントシュタイン中尉、別にわたくしの言つたことが分からなくても良いのです。あなたは、マリンドルフ伯爵家とカストロフ侯爵家の間の事情を何も知りませんから。分からなくて当然ですよ。分からないからと言って、鐘で殴つたりはしませんから、安心なさい」

言われて、思わずミハエルは頭を押さえそうになる。この老貴婦人が士官学校の数学教官を務めていた頃、物わがりの悪い生徒はしばしば、彼女が手に掲げてくる巨大な牛飼用ハンドベルで頭頂を一撃される羽目になったものだ。頭蓋骨を割られるかと思つた……同級生からはそう聞いたが、彼自身はハンドベルの洗礼を受けたことはない。そう言えば、ロートリンゲン教官が容赦なくハンドベルを振り下ろす相手は、数学の講義での劣等生ではなかった。「なるほど、君が士官学校でどんな教官だったのかよく分かったよ。私も君の言つたことを聞かないと、ハンドベルが頭の上から降つてきそつだ」

「今日は持つてきていませんから安心なさつて結構ですわ。わたく

しがどんな生徒に手を上げたかは、この若者が知っています。それで、お約束はして下さるんですの、マリンドルフ伯爵？」

「選択の余地はなさそうだね。それに私一人ではなく、ヒルダの身にも関わるなら、私に否やはない。君から連絡が来るまで出発は待つ。これでよいかね？」

「よろしうございます、伯爵。これで、わたくしがマリンドルフ星系まで来た甲斐があったというものですわ。とにかく、フランス。くれぐれも気をつけて下さいね。どんなことになっても絶対に諦めないで下さいな」

「まるで今生の別れのようなことをいうんだね、マリア・アントニア」

「そうですね……」

立ち上がり、マリア・アントニアは静かに微笑んだ。

「一度別れば、明日もう一度会える保証なんてどこにもないんです。そういうものではありませんか。慌ただしくて申し訳ないけれど、中尉、このまま帝都へ戻ります」

「え……あ、はいっ、お供します！」

結局、自分は何をしにマリンドルフ星系まで来たのだろう……首をひねりながら、ミハエルが、マリア・アントニアとともに帝都へ向かう船上の人となったのはその翌日のことだった。

ウジーが帝都の郊外近く、マリンドルフ伯爵邸を訪れたのは、ミハエルがロートリンゲン伯爵夫人とともに帝都に帰り着いた、その翌日の午後だった。

「こんにちわー！ ブラントミユラー・ケーキ店の者ですけど、ケーキのご用命はございませんかあ？」

伯爵邸の門衛たちは、彼らの目の前に立った赤みの濃い金褐色の髪とびっくりするくらいに大きな目、余り高くない鼻の回りの肌は薄くそばかすを散らした少女の姿に唾然として目を見交わした。防寒用らしい、誰かのお下がりの古ぼけたダッフル・コートを着込んでいるが、白い上っ張りらしい袖口が覗いていた。

「ブラントミユラーだって？ 聞かない名前だな。そんな店が来るとは聞いていないぞ」

「だって、お訪ねするのはこれが初めてですから。どうか、今後鼻原にお願いします」

ぴよこんと頭を下げ、ウジーは素早く店のチラシを門衛に手渡した。マリンドルフ伯爵家の伯爵令嬢ヒルデガルト様ご本人か、あるいは伯爵家の家令か、とにかくどちらに渡してくれとミハエルに頼まれた店のチラシだ。

「なんだあ……ブリュネ地区のブラントミユラー・ケーキ店だと？ おい、これって町のケーキ屋じゃないか」

「そうですね、ブリュネ地区で一番のお店です。美味しいですよ。あたしが保証します」

「お前、ここがどなたのお屋敷か知ってきてるのか。マリンドルフ伯爵様のお屋敷だぞ。そんな町のケーキ屋が入りできるお屋敷じゃないんだ。お屋敷には専門のシェフもいれば、パティシエもいる。お前たちのような連中は呼びじゃないんだ。分かったら、さっさと帰った、帰った」

「困ったなあ。あたしにも用事があるんです。ちょっと良いですか

ら、お嬢さまか、そつでなかつたら執事さんにそのチラシ、見て頂けるようにしてもらえませんか」

「用はないと言つただろう。こんなチラシなんか、取り次げるか」

「そこを何とかお願いします。一生のお願いです。どうか、お願いします」

「しつこいなあ。俺たちも暇じゃないんだ。そんな吹けば飛ぶような店のチラシなんかいちいち取り次いでたら、門衛の仕事にならんじゃないか」

「でも、そんなに町中の店が来るわけじゃないんですよ。一軒くらい例外があつたつて良いじゃないですか。あたしにも仕事があるんです。助けると思つて、お願いします」

「もう、口の減らないガキだ。いい加減にしないとたたき出すぞ」

「たたき出すつて、まだお屋敷の中に入れてもらつてもいけません」

「門の前に立たれるとじゃまだと言つているんだ」

「今はどなたもいらつしやらないでしょう。あたし一人くらい、邪魔になつたりしないと思います。ほんの五、六分で済む用事なんですから……」

懸命に食い下がりがながら、ウジはちらちらと腕時計に目をやっている。ミハエルからの情報が間違いがなかつたら、そろそろの筈だ。町のケーキ屋が伯爵邸に出入りするなど最初はつから無理なのは分かりきつたことなのだ。問題は、目的の時間に伯爵邸の前に立っていること。その時間まであと数分。

と門衛たちの視線がずれる。ぺらぺらとまくし立てるケーキ屋の小娘に手を焼いていた彼らが同時に姿勢を正し、困つたように視線を見交わすのを確認して、ウジは素早く彼らの視線をたどつ

た。

「うわ……美人！」

思わず感嘆の声が出た。意外にもその人物は舗道を徒歩でやってきた。飾り気のない冬物のコートを羽織つた姿勢の良い、律動的な歩き姿。短くした、やくすんだ色合いの金髪を戴いた顔は抜けるように白く、まるで白大理石の彫刻のような硬質の美貌だった。

「あら、どつしたの。何かあつて？」

嘘やごまかしのきかない鋭さと、生気に満ちた視線が強い。ブルーグリーンの焰が踊っているような瞳が、彫刻的な美貌に生き生きと活力を溢れさせてウジを見詰めた。

「いえ、何でもありません、お嬢さま。すぐに追い払いますから」

門衛の言葉がウジを確信させた。この女性がマリーンドルフ伯爵令嬢ヒルダガルト。ウジは彼女に会いに来たのだ。ミハエル……実は、ロートリンゲン伯爵夫人マリア・アントニアの頼みこそ、ヒルダに会つてあるものを手渡すこと。それがロートリンゲン伯爵夫人からのものであることを誰にも気付かせずに……だった。

帝都の大学に通うヒルダがこの時間に自宅に戻つてくることは分かっていた。だが、だからといって大学の門やこの伯爵邸の前で待っていたのでは、あからさますぎる。あくまで偶然にヒルダと出会つたように見えること。それがウジへの依頼だった。どうやって偶然を装つかはウジの工夫に任せる。そう言われれば、ウジも後には退けなかつた。

「追い払うなんて穏やかじゃないわね」

果たして、ヒルダが門衛たちを宥めてくれた。ヒルダがこつという人柄だと言つことも、ミハエル経由でそのなんとか伯爵夫人から聞

き出してある。

「何の御用なのかしら、お嬢さん」

「ケーキ屋のご用聞きですよ、お嬢さま。いきなりやってきて、チラシだけでも良いからお嬢さまかシュテルツァー様に取りつげって騒ぎ立ててるんです。お嬢さまがお構いになることはありません」

「チラシを……ちよつと見せてくれる？」

「いや、なにもお嬢さまがご覧になるようなものじゃあ……」

「いいから見せて」

ヒルダが差し出した手に、門衛が渋々チラシを渡す。ブルーグリーンの目が素早く動いてチラシの文面を確認する。金色の肩がちよつと動いて、チラシをひっくり返す。その視線がある一点でびたりと停まるのを、ウジーは確認した。

「ブリュネ地区から来たのね？」

ヒルダの声に変化はなかった。丁寧にチラシを折りたたみ、コートの内ポケットに入れる。

「はい、ブリュネ地区のプラントミューラー・ケーキ店です」

「そう。マリアさんはお元気？」

「ええ、とっても元気です。でも、ちよつとフランツさんのお隣が煩くて色々困ってるって」

「フランツさん……お隣が？」

もう一度、肩が少し動く。それから表情が緩んで笑顔が浮かんだ。眩しいものを目の当たりにした思いで、ウジーはちよつと目を細める。残念ながら、自分とは格の違う美人、こついつう人を絶世の美女と呼ぶのかも知れないと思う。でも、今のは上手くいったと思う。いきなり『マリアさん、お元気』には驚いたが、マリンドルフ伯

爵の名前がフランツであることを調べておいてラッキーだった。

「ここは寒いわね。わざわざブリュネ地区から来てくれたんですから、お茶でもいかがかしら、ええと……」

「ウジーです。ウジー・ザーネヘルシュテラー」

「ザーネヘルシュテラー？」

門衛二人が同時に目を瞠り、吹き出すのを辛うじて押しとどめるのを素早くウジーは確認して、唇をへへの字に歪めた……笑いたければ笑ってんだ、このすつとこどつこい。ちよつと不機嫌な気が吹き上げてくるのを押さえきれない。ザーネヘルシュテラーとはクリームを作る人という意味なのだ。化粧品化粧品のクリームではない。お菓子のクリーム。ケーキ屋の職人として、これ以上に相応しい名前は少ないだろう。

同郷にブッターヘルシュテラー……バター製造人の意味だ……という友人もいたが、さすがにその名字で生まれなくて良かったと思ふ。ウルシュラの普通の愛称、ウシーが牛ウシに通じると同様、ブッターが豚シュヅクと同じ発音になる言語があることは故郷ラストエグで広く知られている。ウシー・ブッターヘルシュテラーじゃ、『牛豚』になつてしまふ。もしその名で呼ばれるようになったら、女の子としてはほとんど絶望的な気分になるに違いない。帝国中でも伝えられている地域もほとんど残っていない超ローカル言語、気にしなければいいのだが、逆に知つてしまつとどうにもこだわりから逃れられないのも確かなのだ。

「ケーキ屋さんに相応しい名前ね」

ヒルダが心底愉快そうに微笑つたのがウジーには分かつた。意外な気がするはずだったけれど、この人は好きになれそつだと思つた。

自分など足許にも寄れないような大貴族のお嬢さまだけれど、人を好きになつたり嫌いになつたりするのは、そんなどうでも良い属性のせいではない。少なくともウジィはそう思っている。

「ええ、フルネームはウジィ・ブレイツェン・ザーネヘルシュテラーです。自分でもケーキ屋になるために生まれてきたんだと思つてます」

ブレイツェンはお菓子のクッキーの意味もある。いったい、両親は自分の名を付ける時、何を考えていたんだろうと思つこともしばしばだ。最初からケーキ屋の職人にするつもりでこの名前にしたのか。それにしても、帝都へ出ると言つた時、一番反対したのは両親だった。

「ウジィって呼んでください」

「じゃあ、ウジィ。お茶はコーヒィがいい、それとも紅茶。どちらも用意できるけれど、お好みを聞かせて」

「紅茶をお願いします」

「じゃ、おいでなさい、ウジィ。わたしが案内するわ」

「あ、あのお嬢さま。困ります。あとでシュテルツァー様に我々が叱られますから……」

「ハンスにはわたしから話しておきます。大丈夫よ、ヒルダのいつもの気まぐれだつて」

ウジィが思わず見惚れたほどに鮮烈な微笑に表情を彩らせ、ヒルダは律動的な歩調もそのままに邸内に入っていく。慌ててその後を追おうとして門衛たちに気付き、ウジィは彼らにべこりとお辞儀をする。一瞬、気を吞まれて言葉を見失つた門衛二人の視野の中で、ウジィの姿はヒルダを追うようにして建物の中に消えた。

ヒルダにくつついて邸内に入ってきた見知らぬ小娘に、伯爵家の家令であるハンス・シュテルツァーは一瞬眉を蹙めたが、ヒルダが「今、そこで知り合つたの。フロイライン・ザーネヘルシュテラーよ」と紹介すると頷いて表情を消した。脱いだコートを預けながら、ヒルダはその内ポケットから取り出したチラシの裏面を示した。辛うじて見て取れるほどに小さく、しかし正確に描かれたマリア・アントニア・フォン・ロートリンゲン伯爵夫人の花^{ハインド・イットクラフ}押。ハンスは大きく眉を跳ね上げた。

「お嬢さま、これは」

「お父様と、カストロプ侯爵家に関わることね。大叔母様がこんな風に連絡を取つてこられるなんて普通じゃないから。紅茶と、そうね、ケーキか何かあるかしら。フロイライン・ザーネヘルシュテラーにお出しして。部屋に行きます」

「はい、お嬢さま」

「お父様から連絡は？ カストロプ星系行きは思い止まられたの？」

「連絡はございましたが、断念なさつたか否かまでははっきりとは……」

「FTLの予約を取つて、ハンス。もう一度、お父様と話します」

「承りました」

穏和で争いを嫌う父である。カストロプ侯爵家、というより、あの愚かなマクシミリアンが無用の争いを引き起こすとしていたのである。自らカストロプ星系へ出向いてマクシミリアンに翻意を説こうとする。いかに父フランツらしかった。

「今からでは遅い。なんて無駄なことを。お父様」

ヒルダもマリア・アントニアと同意見だった。もう遅い。今から説得に行っても、マクシミリアンが承伏するとはとても思えない。彼は典型的な門閥貴族の『どら息子』だ。隣接恒星系の領有者の子弟であり、年齢も近く、少なくとも回数に面識をもっているだけに、ヒルダの評価は辛辣を極めた。マクシミリアンの父オイゲン卿は陰謀家であり、寝業師であり、表裏常のない詐欺師のような男だったが、同時に強かな政治家だった。だから、長きにわたって財務尚書の地位を独占し続け、莫大な私腹を肥やすことに成功した。

しかし、マクシミリアンには父オイゲンの手腕のかけらもない。彼にあるのは、オイゲンの成功の結果得られたカストロプ侯爵家の特権であり、財力であり、オイゲン卿の息子であるというただその一点だけを理由として彼に向けられる阿諛追従だけだ。父フランツの説得は、一〇中一〇、マクシミリアンの異常なほどに膨れあがり肥大化した自我に対する強烈な痛撃として受け取られることになる。結果は火を見るより明らかではないか。

一瞬だが、かなり険しい表情になっていたらしい。ヒルダは、ウジーが微かに怯えたように半歩を下がるのを見て、無理にでも表情を和らげた。

「ごめんなさい、ウジー。こちらよ」

幾つかある応接間ではなく、ヒルダはウジーを私室のサロンに案内した。サロンのソファに差し向かいに座を占めると、ウジーのよく動く瞳がくるくると室内中に視線を走らせ始めるのが分かった。驚いてはいるのだろうか、決して物怖じしたり、萎縮したりはしていないようだった。

「何かおかしなものでもあった？」

ウジーが僅かに首をひねったように見えたのは錯覚ではなかったようだった。

「もつときらきら、ひらひらした部屋を想像してた、あの、してましたから」

伯爵家のお嬢さまのお部屋と言つことで、例えば白い壁に淡桜色のふかふかの絨毯、金と銀、クリスタルグラスをはめ込んだスタン ドやシャンデリア、淡色の縁取りの付いた毛皮のクッションと白いソファなど、いかにもそれらしい豪華、というより煌びやかすぎる内装を期待していたのだろう。そうだとすれば、ヒルダの私室は彼女の期待を完全に裏切っただろうし、実際ウジーの言葉もそれを告げている。

「きらきら、ひらひらは余り好きじゃないの。確かに綺麗なものは嫌いではないわ。でも、実際に使つとなると、色々使いにくくて結局そばには置かなくなるのよ」

「ふん、そうなんですか」

ウジーが頷いた時、ドアがノックされ、ハンス自身がティー・セットとサクランボ・ケルキの皿を載せた銀盆を携えて現れた。

紅茶が注がれたティーカップが前に置かれると、ヒルダが勧めるままにウジーはカップを手に取り、ゆらゆらと立ち上る湯気に頬を撫でさせる。いかにも嬉しそうに目を細め、香りを楽しんでいようた。

「これって」

ヒルダとハンスに小さな驚きをもたらしたのは、ウジーが見事に紅茶の銘柄を当てたことだった。二人が驚いたのを察したのか、ウジーは頬を赤くしてべこりと頭を下げる。

「済みません。やるなって言われてたんですけど」

いいケーキ職人になるには、コーヒーや紅茶を初めとした飲料にも詳しくなくては駄目だというのが師匠のブランドミユラーの持論だった。給料とは別に、ほんのちよつとだが『飲み歩き、食べ歩き手当』というのが出て、それを貯めては、有名なカフェやレストランでティー・タイムを試すのがウジの修行の一つであり、同時に楽しみでもあった。

同時にブランドミユラーは、知識は使うもんだ、ひけらかすものじゃないというのも口癖で、人前でのコーヒー・紅茶、ひいてはワインの銘柄当てなどは『胸くその悪い成金趣味』だと言って嫌っている。

「でも、今、淹れてもらったような紅茶は滅多に口にできるものではなくて、だからこそ思わず確認したくなつたんです。だって、間違ひじゃなかったら、こんなお茶を味わたのつて凄くラッキーって思えるし、そうでなかったとしても、ああ、世の中にこんなお茶があるんだって感心できる　つて、ええと……」

不意にウジは我に返つたように、ヒルダと、それからハンスの顔を交互に見やった。浅く小麦色に日焼けした顔に見る見る血の色が差してくる。

「あ、あ、あ、す、済みません。あたしつてば、勝手なことを一人でしゃべっちゃつて」

途中で止めかけていた手を、ヒルダはさりげなく動かしてティー・カップを口許へ運ぶ。普段、余り食事や飲み物に注意を払わない彼女だが、この時はいつになく香りが心地よく鼻腔へ抜け、咽喉へ滑り込む熱い液体の味わいもより快く感じられた。ウジの、

いかにも職人氣質の一途な話し方は彼女にとって不快なものではなかった。

ハンスがほんの少しだけ目を細め、微かに頷く。彼にもウジが危険な人物でないと判断されたようだ。

「それで、ウジ。今日、あなたが訪ねてきてくださった理由を聞かせていただけるかしら」

今度はサクレランボ・ケルキに注意を惹き寄せられかけていたウジは、慌ててケーキの一片を口に放り込むと、忙しげに頷いた。

「さっきのチラシですけど……」

「見たわ。あれは、どなたからもらったの？」

「ロートリンゲン伯爵夫人です。ええと、直接じゃなくて人づてなんですけど、あのチラシを持ってマリーンドルフ伯爵様のお屋敷の前で、お嬢さまのフロラヤン・ヒルデガルト様^{フロラヤン・ヒルデガルト}に会つてきてくれ。そう頼まれたんです。ヒルデガルト様がいらつしやらなかったら、執事のシュテルツアー様に……」

「今日、この時間にわたしが学校から帰ってくることは知っていたの？」

「それは伯爵夫人からお聞きしました。ヒルデガルト様のお顔は知りませんでしたけれど、ご用聞きのみして、門衛の人たちとだべつて……いえ、しゃべっていたら、きっと分かるはずだと思つたんです」

お嬢さまが帰ってきたら門衛たちの態度や顔色が変わるに違ひないから。もし、ただ門の前に立つていたら、ヒルダが帰ってきて

もすぐには気付けないし、ヒルダが車か何かで邸内に入つてしまえばそれまでである。

「伯爵夫人は時間がないから、どうしても今日中にヒルデガルト様
に会ってきてくれとおっしゃってました」

「あの、ウジー……できれば、ヒルデガルト様というのは止めてく
だらさない?」

自分の名前には違いないが呼ばれなれていない。物心ついたころ
から、ヒルダと呼び慣わされてきた。

「ヒルダで良いわよ。普段、そう呼ばれているから」

「え……でも」

「堅苦しいし、ヒルダの方が慣れてるから。気にしないで」

「はい……」

「それで、あなたとロートリンゲン伯爵夫人はどういうお知り合
い?」

ウジーがケーキ・フォークを皿に置く。いかにもケーキ屋の職人
らしい、糊のきいた白い上つ張りの右袖のボタンを外すと、一気に
上膊部までめくり上げた。

ヒルダは思わず眉を顰める。肘の所、そして上膊部から右肩口に
かけて、まだ新しい手術の痕が生々しかった。この時代、相当な大
手術であっても、手術痕を跡形もなく消してしまっただけの形成外科
技術は確立されて久しい。ただし、その形成手術を受けられるだけ
の費用をまかなえれば、だが。

ウジーが言いたいのは、しかし、手術の痕を取り除く手術を受け
られないと言っただけではなかった。昨年未頃に誘拐されかかり、
その時に重傷を負ったこと。治療費用がなく、そのままではケーキ
職人への夢も絶たれて路頭に迷っただけのこと。二人の知
人……その時は知人でも何でもなかったのだが、ミハエル・タウゼ

ントシュタイン中尉とロートリンゲン伯爵夫人が治療を受けさせて
くれ、おかげで自分がケーキ職人としての道を歩め続けていること。
この手術跡は、その時のものなのだ。たとえ痕を消せると言われて
も、敢えて消さないだろう。恩人たちのことを忘れないために
と。

「だから、タウゼントシュタイン中尉さんとロートリンゲン伯
爵夫人はあたしの生命の恩人なんです。伯爵夫人には一度だけで
すけど、お会いしたこともあります。退院の時に御舞いに来てくだ
さって」

「伯爵夫人は何か仰った?」

あの大叔母のことである。きつと、『誰にも機会は平等に与えら
れるべきです。スタートラインに同時に立てる機会を平等に。スター
トラインに立たないようなハンデを最初から持っている人間には、
その力と機会のある人間が援助を与えるべきです』とでも言ったの
だろう。

「が、ウジーは小さく微笑って首を振った。

「無期限・無利息で出世払いにしておくれけど、貸したお金は返し
ていただきますよってそう仰いました」

「貸したお金を……?」

「はい。返せる相手だと思っただから、貸したんだから期待を裏切ら
ないで下さいね……って」

伯爵夫人のためにも立派な職人にならなきゃならないんです、と
ウジーは思い切り力を込めて頷いて見せて、それから再び脱線しか
かっている自分に気付いたらしい。こほこほと咳払いして姿勢を正
す。

「……ですから、伯爵夫人のお頼み事だったから、喜んで引き受けたんです」

「間に入ってくれたのが、そのタウゼントシュタイン中尉？」

ヒルダはハンスに目配せする。二人のカップにお代わりの紅茶を注ぐと、ハンスは静かに部屋を出て行った。

「はい、ミハエル……じゃなくてタウゼントシュタイン中尉さんです」

耳元で小さな電子音。ピアスから、ヒルダにだけ聞こえる音量の、ハンスの声が流れ出す。邸内だけで使える超近距離通話だ。

『ミハエル・タウゼントシュタイン中尉。士官学校首都校を三番の成績で卒業後、今年一月まで憲兵隊総監部ブルーメンタール中将副官を務めています。一月に副官職を解かれて待命。最近、マリア・アントニア様の私的護衛官としてロートリンゲン伯爵家へ赴任しています。待命になったのはブルーメンタール中将の不興を受けたからのようですが、どうやらフロイライン・ザーネヘルシュテラーの件がからんでいるようです。詳細は非公開になっておりました』

「ありがとつ、ハンス」

「ミハエル……タウゼントシュタイン中尉のことを調べたんですか、ヒルダ……様」

察しの良い娘だった。ヒルダとハンスの会話は聞こえなかった。ただろうが、ミハエル・タウゼントシュタインの名が出ると同時に部屋を出て行ったハンスと、ヒルダが一瞬耳元を押さえて小声で話し始めたのを見ると素早く結びつけたのだろう。

「ええ。悪く思わないでね、ウジー」

「悪くだなんて……もし、あたしや中尉のことを全然調べなかった

ら、それってつまりはあたしの言ってることを信じてないってことですよ？」

「そういうことね」

「調べて、それで信用できる相手だって思いました？」

「ええ。ロートリンゲン伯爵夫人、わたしの大叔母があなたを信頼して、ここへ寄越したことを信じます。ウジー、用件を伺わせて」

ウジーは両手を挙げ、きちんと結び上げてあつた髪をほどく。赤みの強い金褐色の、意外に長い髪が肩から背中の中程へ流れ落ちる。髪を留めていた数本のピンをテーブルに並べると、ウジーはその中を一本を拾い上げた。

「これです」

「？」

半信半疑で受け取り、ヒルダは気付く。ピンの側面に指先で微かにそれと分かる刻みが付いている。かつて、マリア・アントニアに一度だけ見せてもらったことがある。宮廷の貴婦人達が密かに愛人と連絡するために使ったという超小型のメモリ・モジュールだ。一般に流通しているものではない。有力な貴族ならば専用の読み取り機はごくありふれた備品だが、高価なものであることに変わりはない。

「中身は何か、聞いていて？」

「いいえ」

サクルンボ・ケルキの最後の一切れを飲み込み、それからいかに美味しくそうに紅茶を口に運ぶ。ほどいた髪が大きく左右に揺れた。

「内容は聞かない方が良さし、そのピンがなんなんだかも知らない方が良さしって仰っていたそうです」

「それは……そうね。ちょっと待っていてくれるかしら」

立ち上がり、ピン型メモリ・モジュールを書斎の読み取り機にかける。

意外にも文面は簡素を極めていた。父マリーンドルフ伯爵フランスが、カストロプ星系に向けて間もなく出発すること。出発前に伯爵はある公式書類を典礼省に送ったが、その文書が効力を得るにはヒルダが自ら典礼省へ出向く必要があること。その一点だけだった。

「お父様が……」

ヒルダのブルーグリーンの目の光が強くなる。思わず、唇を思い切り噛みしめた。大学とビジネス・スクールで極端に多忙だったとはいえ、やはり帰郷して直接父を説得すべきだった。手紙では何度も、マクシミリアンへの説得が無駄どころか父自身の身にも危険が及ぶとして、カストロプ星系行きを断念を勧めていたし、ここ数日はFTL経由の映話でも話をして、説得していたのだが、どうやら父は事態をずつと軽く見ていたらしい。もう一度、父が出発する前にFTLで話せるとは思いが、おそらくはすでにマクシミリアンとはアポイントを確認してしまっているだろう。物堅い父が、ヒルダの説く仮定のリスクを、カストロプ侯爵家との儀礼に優先させる可能性は低い。

それに

「書類……?」

貴族が典礼省へ送る公式書類は多岐にわたる。さらにその親族が典礼省へ確認に向かわなければ効力を発揮しない書類も少ない数ではない。カストロプ星系での情勢が緊張を強める中、マリーンドルフ伯爵が動乱回避の説得へ向かおうとしている今の時点、典礼省に

送られた公式書類のことを、これほど持って回ったやり方でヒルダに伝えなければならぬのはなぜだろうか。

さして考える必要はなかった。書類の正体を思いついた時、ヒルダは思わず眉を蹙めた。マリア・アントニアは最悪のケースを想定して、父にその書類を作成させたのだろう。

では、この書類が典礼省に提出されたことを、このケーキ屋職人修行中の少女を使ってまで、マリア・アントニアが隠し通そうとした相手はだれか。それがつまり、ヒルダが今後の行動で最も警戒すべき相手ということになる。

これも考える必要はなかった。現在の所、マリーンドルフ伯爵家が係争を起こすことになる相手は、カストロプ侯爵家以外にあり得ない。

「まさか……あのマクシミリアンが、そんなことまで」

呟きかけ、ヒルダはくすんだ色合いの金髪を揺らめかした。マクシミリアンは将来の見える男ではない。しかし、案外にすぐ目の前の企みにだけは極度に細心であるということもあり得るではないか。財務省の徴税官に有角犬をけしかけるような考え無しさと、短期間にカストロプ侯爵家の私兵部隊を星系主星に動員・集中させる細緻さとが同居しているのが、あの『どら息子』である。少なくともマリア・アントニアは、マクシミリアンをそう見ていることになる。

サロンに戻ると、ウジーはすでにもとのように髪を結び上げ、右袖も元に戻してきつちりとボタンを留めて、立ち上がっていた。

「ごちそうさまでした、ヒルダ様。紅茶、すごく美味しかったです。ありがとございました」

「サクランボ・ケルキはお気に召したかしら?」

「ケーキも美味しかったです。すつごく良い素材を使ってるのが分かりました。あれって、マリンドルフ伯爵様の御領地からのお取り寄せですか？」

「マリンドルフ星系の方ではないわ。帝都星にも少し荘園があるから、そちらから持ってきているものもあるけれど、この家は、普段は余り人がいないの。だから、ほとんどは出入りの人から買っただけで十分。今日のサクルンボは荘園のだと思うけれど、季節は外れているからきつと採れたてではないわね。それで、職人として、ケーキそのものにはコメントはないの、ウジー？」

余り意味のある会話のつもりではなかった。書斎から戻る前にハンスを呼び戻した。彼が戻ってくるまでのつなぎのつもりだった。

「フルーツとクリームのパランスは最高でした。あたしが食べた中でも最高だったし、あたしみたいな見習いが作ったら中々ここまでできないと思います。でも、ちょっとケーキのスポンジがぱさつてました」

「え？」

「多分、ブランデーを使ったと思うんだけど、生のままのを使ったから、十分なくらい使うとブランデーの香りが強くなりすぎるから最小限度使ったんでしようけど、やっぱり足りてないんだと思います。それに、折角おいしいサクルンボなんだから、キルシュヴァッサーを水で薄めたのを使った方が良かったんじゃないかな……」

言い、またウジーは赤くなって頭を下げた。

「生意気なこと言っでごめんなさい」

「いえ、いいのよ。気にしないで」

確かに今日のキルシュトルテはウジーが言うような感じがないわ

けではなかった。ヒルダは、彼女のその後の人生の軌跡のゆえに、食事を含めた身の回りに対する関心が希薄であったと受け取られるのが普通だが、彼女自身の言葉にあるように、自らが専門家である必要はないが専門家を見分ける能力は必要なのである。ウジーの指摘を首肯するに足りる味覚は十分に持ち合わせていた。

「お嬢さま、お車の用意ができました」

姿を見せたハンスにヒルダは軽く頷いて、ウジーを案内するよう指示した。

「フロイライン・ザーネヘルシュテラーをブリュネ地区のプラントミュラーさんのお店に戻るのに一番いい、ヴァイシュ地区の地下鉄の駅までお送りして」

ハンスが眉を跳ね上げた。

「ヴァイシュ地区でございませうか、お嬢さま」

ヴァイシュ地区は新無憂宮を挟んでブリュネ地区から最も離れた地域になる。このマリンドルフ伯爵邸からも決して近くはない。

「ヴァイシュ地区でお願いします、執事様」

ウジーだった。

「お店までお屋敷のお車で送ってもらったりしてはいけなないと、伯爵夫人からも注意されてきました。一本で、お店の隣のブロックまで行けるラインがありますから、そのラインに乗れる駅までお願いします」

何度かヒルダとウジーの顔を見比べ、ハンスは半ば不得要領な表情のままに頷いた。

「承りましてございます、お嬢さまがた」

出掛け、ケーキ屋の制服の上から古ぼけたダッフル・コート

織ったウジーはもう一度、ヒルダに向かって深々と頭を下げた。

「今日は本当にありがとうございました、ヒルダお嬢さま」

「こちらこそ、ありがとうございました、ウジー……落ち着いたら、また会いましょう」

意外な言葉だったらしい。ウジーはその大きな目をさらに大きく丸くして、そしてさらに深く頭を下げた。

「ありがとうございます！」

ハンスが戻ってきてから、ヒルダは思いついて今日のキルシュトルテについて訊ねてみた。ほんのちよつとスポンジがばさついでいかなかった？ と。

ハンスは驚いたようだった。

「良く、お気づきになりましたね」

実は担当者が、母親の病気を理由にして数日前に辞めてしまったのだという。本来なら、退職一ヶ月前の通知が義務なのだが、彼の母親は急病で倒れており、時間的猶予がほとんど無かったこともあり、通常の辞職を認めたのだという。ただ、困ったのは後任だった。

「シエフの息子がもともとパティシエ志望でございまして、昨年からそちらの学校に行つておるのに、ここ数日は任せております」

まだ若くて経験の浅さが出ることもしばしばだが、決して腕は悪くない。学校をきちんと了えて、経験を積んでいけば、良いパティシエになるのは間違いないのだが。

「お嬢さまのお言葉は伝えておきますしよつ」

「わたしが怒っている、なんて言わないでね、ハンス」

「無論でございます。お嬢さまからのアドバイスとして申し伝ええます。良い励みになりますことしよつ」

「お願いね、ハンス」

ラインハルト・フォン・ローエングラムは、その志を立てた一〇歳の時から、未来の幕僚たるべき人物を意識して識別し、その脳裡の名簿に名を刻み続けていった。僅かに異なるが、ヒルダもまた、自らの人生を共にすべき友人たちのリストを胸裡深くに畳んでいたが、この時、ヒルダはウジーの名をその中に連ねた。自らが天職への望んだ職業への真つ直ぐな情熱と夢を抱くウジーはヒルダにとつて友人たるに十分すぎるほどだった。そして、夢と情熱を支える確かな知識と経験、それに真摯な人柄もヒルダが好意を持って迎えるに余りあるものをウジーは持っていた。無論、敬愛する大叔母マリ・アントニアが庇護しているという経緯もあるが、それだけではない。

「落ち着いたら、また会いましょう」

その言葉に嘘はなかった。ヒルダは、この日の『お使い』には敢えて謝礼を出さなかったが、ブランドミューラー・ケーキ店が、ウジーの『お使い』の報酬を受け取るのは更に後日になってのことになる。

「ウジーを送つたら、わたしも出かけます。準備をお願いするわ」

「どちらへ？」

ブルーグリーンの瞳を上げ、ヒルダは静かに告げた。

「典礼省までよ、ハンス」